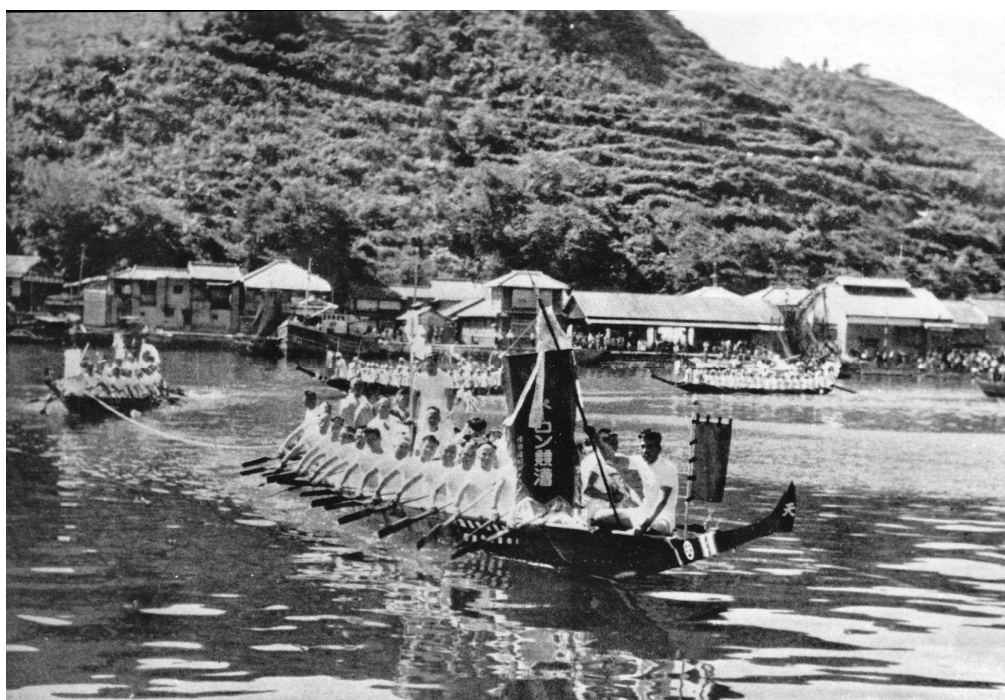


【展示解説】

相生ペーロン



2017. 8

相生市立歴史民俗資料館

〈はじめに〉

相生でペーロン競漕が始まって、まもなく100年を迎えます。伝統文化が時代とともに変化する中であって、1922年（大正11）に長崎からもたらされたペーロン競漕のあり方が伝統として今日まで保持されてきたことは意義あることです。

また、ペーロン祭も市民の熱い想いに支えられ受け継がれてきました。現在はペーロン競漕への参加者も増え、前夜祭の花火大会等の関係行事を含めて市民の祭として定着しています。

2016年（平成28）には、ペーロン競漕が伝統文化の継承をはじめ地域振興・文化交流・ふるさと意識醸成等に大きな意義をもつことが認められ、相生市の文化財（無形民俗文化財）に指定されました。

〈ペーロンの起源〉

紀元前300年頃、中国の戦国時代に楚の屈原は宰相として懐王を助けて善政を敷き、名宰相といわれていたが、讒言によって政界より退けられた。その後、懐王は秦の裏切りにより捕らえられて客死した。

屈原は楚の国運をなげき、汨羅（湖南省を流れる川）に身を投じた。楚の人々は屈原の死を悲しみ、ちまきを作って川に投げ、龍船「白龍」を浮かべて競漕し、その霊をなぐさめた。

ペーロンの語源は、「白龍」の中国音であるパイロンが訛ってペーロンになったといわれている。

中国における龍船は、龍を象った船で、舳に龍の首、艫に龍の尾、船体両側に龍の鱗を描いたものであった。

龍は原始信仰から生まれた架空の動物で、龍神・水神などの神格をもつようになった。天空や水中の支配者としておそれられ、またその威大な力にすがって無事平安・豊漁・豊作・雨乞いなどが祈願されてきた。競漕用の船が龍に象られたのは、龍が天空を駆けるように軽く飛ぶように走る船として、また海上安全を祈願する呪術的意味をもっていると解されたからである。

〈ペーロンの伝播〉

その後、「ペーロン競漕」は中国各地に伝播するとともに、海を渡って台湾、沖縄、長崎へと伝わっていった。

台湾では「爬龍船」（現地の発音はペーリョンツェン）とよばれ、200年以上の歴史があるといわれている。旧暦の5月5日の端午の節句を中心に2～3日の行事があり、無事平安を祈願する。

沖縄では「ハーリー船」とよばれ、豊漁・豊作・無事平安などを祈願する儀式をとまなう神事として行われる。開催期日は沖縄各地の伝統的・季節的行事と結びついて一様ではない。

〈長崎ペーロン〉

1655年（明暦元）、長崎の出島を訪れた数隻の中国船が暴風雨に襲われ出航できなくなった。神の怒りを鎮めるために母国で行っていたペーロン競漕を奉納しようということになり、ありあわせの船を集めて競漕を行った。これが長崎ペーロンの始まりとされ、以後、端午の節句の行事として取り入れられた。戦中・戦後の長期間の中断の後、1977年（昭和52）に再び行われるようになった。

長崎出島で行われたペーロン競漕は、長崎各地に早くから伝わり、崎戸町では寛政年間（1789～1800年）に、伊王島町では1819年（文政2）に始まった。少し遅れて大瀬戸町（現西海市）では1877年（明治10）頃、「さなぼりペーロン」として始められた。

西彼町（現西海市）のように、1972年（昭和47）から始めたところもあり、1986年（昭和61）発行の長崎県観光連盟のパンフレットには、32の大会が記されている。現在は、季節的行事と結びついたペーロンのほか、交流・娯楽行事、観光・地域振興行事として行われている。

長崎ペーロンには360年余り歴史があるが、一方で長い時間の経過と行事の多様性によって、ペーロン船の形や色彩・装飾、銅鑼の形状、乗船人員などが大きく変化した。

〈相生ペーロンの歩み〉

◇ 1922年（大正11）

播磨造船所内の従業員の慰安として企画された海上運動会に、長崎県人の発案を採用し漁船をペーロン船に仕立てて競漕を行ったのが始まりである。銅鑼の代わりにブリキ缶をたたき威勢よく競漕し、従業員、町民から拍手喝采を浴びた。

三菱長崎造船所から播磨造船所に移った60～70名の従業員の中に、長崎のペーロン開催圏の人たちがいたといわれている。

なお、2004年（平成16）まで、ペーロン競漕（海上の部）の運営は造船所の労務部門が担当した。

◇ 1923年（大正12）

社員が長崎に行って長崎のペーロン船の見取り図を写して帰り、それをもとに初代ペーロン船「天竜・白龍・神龍」を建造した。総員40名。3代目までは造船所が建造した。

ペーロン船に「天龍」「飛龍」などの船名を付すのは長崎では手熊地区のみであることから、相生にペーロン船をもたらしたのは手熊地区に関係をもつ人たちであった可能性が高い。

大型の直線的船首材をもつ和船型であるが、その船首型式は大正期までの長崎のペーロン船の面影を残している。長崎のペーロン船が時代とともに形態を変化させたのに対し、このペーロン船の仕様・構造が後々まで受け継がれている。なお、初代ペーロン船は老朽化によって焼納され、現存していない。

この年は会社も応援することになり、以後戦中までは5月27日の海軍記念日または前後の日曜日に、造船所構内の天白神社の例祭としてボートレースとともに行われるようになった。皆勤橋が架けられる戦中までは、旧水月旅館前から皆勤橋方面に向かうコースであった。

しだいに社内での各部・職域での対抗戦の形がとられるようになり、応援団が組織され多くの家族も参加するようになっていった。

- ◇ 1934年（昭和9）
中止。^[註]
- ◇ 年代不詳
2代目ペーロン船「飛龍・雲龍・蚊龍^{こう}」を建造。なお、「雲龍」はJR相生駅の新幹線コンコースに保存・展示されている。



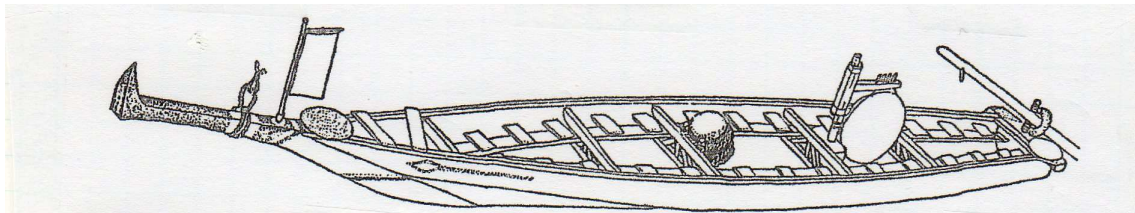
1923年（大正12）頃 橋本・松本編 2009～

- ◇ 1942年（昭和17）
相生市制発足。
- ◇ 1943年（昭和18）
皆勤橋開通。
- ◇ 1944年（昭和19）～1946年（昭和21）
戦中・戦後の3年間は中断。
- ◇ 1947年（昭和22）
海上運動会当日に初めて花火を打ち上げた。皆勤橋が架かったため、ペーロン競漕のコースは旧魚市場前に移った（1957年まで）。



1935年（昭和10）頃 橋本・松本編 2009～

- ◇ 1948年（昭和23）
神戸のみなと祭にあやかり、祭の名称が「海上大運動会」から「相生みなと祭」に改められた。
- ◇ 1951年（昭和26）
相生みなと祭で「ミス海の女神」が選ばれた。
- ◇ 1953年（昭和28）
3代目ペーロン船「天竜・白龍・神龍」を建造。全長13.55m、中央部艇幅1.75m、総員40名、漕手34名、総重量860kg。
なお、「天龍」は相生市立歴史民俗資料館に保存・展示されている。



ペーロン船図 3代目「天龍」 佐々木 1987

- ◇ 1956年（昭和31）
造船多量受注により中止。

- ◇ 1958年（昭和33）
ペーロン競漕が現在の海域で行われるようになった。
- ◇ 1960年（昭和35）
播磨造船所が石川島造船所と合併し、石川島播磨重工業株式会社（IHI）となった。
- ◇ 1962年（昭和37）
毎年日程調整を行っていた祭の開催日を5月の最終日曜日とし、以後定着した（2008年度のみ、国際会議警備の関係で2週間後に変更）。前夜祭行事として海上花火大会が始まった。また、陸上パレードや書道展も始まった。
相生市・相生商工会議所・企業団体による「相生ペーロン祭協賛会」が組織された。会長は商工会議所の会頭が長らく務めた。
- ◇ 1963年（昭和38）
祭の名称が「相生みなと祭」から「相生ペーロン祭」に改められ、「前夜祭の部」「海上の部」「陸上の部」「協賛の部」の部会制を導入して開催されるようになった。
IHI以外の企業が初めてペーロン競漕に参加した。
- ◇ 1964年（昭和39）
公募により「相生ペーロン音頭」が作られ（作詞：岡本淳三 作曲：森田茂雄）、ペーロン踊りが始まった。
- ◇ 1970年（昭和45）
「新相生ペーロン音頭」が作られ（作詞：関根利根雄 補作詞：長岡義人 作曲：鈴木史朗 編曲：西角義一）、陸上パレードのペーロン踊りや祭のPRに広く使われるようになった。
- ◇ 1971年（昭和46）
市制30周年と山陽新幹線岡山開通を迎えるにあたり、「みなとの女王」が選ばれ、ペーロン祭で海上と陸上をパレードした。
- ◇ 1975年（昭和50）
長崎のペーロン船「長崎市手熊町ペーロン保存会」が相生ペーロン祭に初めて参加した。
「相生ペーロン祭協賛会」の会長に相生市長が就任することになり、以後歴代市長が会長を務めた。
- ◇ 1976年（昭和51）
読売テレビ番組「びっくり日本新記録」の企画で、3代目ペーロン船「天龍」が長崎に陸送され、長崎国際埠頭（松ヶ枝）海上保安庁前で長崎ペーロン船と競漕した。
- ◇ 1980年（昭和55）
長崎市代表として「神の島ペーロン保存会」が相生ペーロン祭に参加した（長崎市との正式な交流の始まり）。以後様々な交流が続いている。
4代目ペーロン船「飛龍・雲龍・昇龍」を建造。全長12.00m、中央部艇幅1.58m、総



1967年（昭和42） 神戸新聞社

員32名、漕手28名、総重量500kg。3代目より一回り小さく、この型式が現在まで引き継がれている。4代目から相生市の援助で「相生ペーロン祭協賛会」が建造主体となり、長崎市牧島の塚原造船所で建造されるようになった。建造費250万円（船本体180万円、櫂・銅鑼・運搬70万円）。

なお、「昇龍」は「ペーロン海館」に、「飛龍」は三重県鳥羽市「海の博物館」に保存・展示されている。

- ◇ 1981年（昭和56）
男子中学生チームが「ヤングペーロン」として初めて試行乗船した。
- ◇ 1985年（昭和60）
5代目ペーロン船「天竜・白龍・神龍」を建造。なお、「天竜」は「道の駅 あいおい白龍城」東の屋外テラスに、「神龍」は相生市立中央小学校に保存・展示されている。
市内全中学校の男子チームが「ヤングペーロン」としてペーロン競漕に参加した。ペーロン競漕への女性参加について検討が始まった。
- ◇ 1986年（昭和61）
女子中学生チームが「ギャルペーロン」として初めてペーロン競漕に参加した（女性参加の実現）。
- ◇ 1987年（昭和62）
市内全中学校の女子チームが「ギャルペーロン」としてペーロン競漕に参加した。また、相生市内のクラブチーム「陸」が初めてペーロン競漕に参加した。
「陸」がペーロン船「天竜」を建造した。
- ◇ 1988年（昭和63）
市外のチーム（6チーム）が初めてペーロン競漕に参加した。
- ◇ 1989年（平成元）
相生市・長崎市お互いのペーロン大会に「市長杯」の贈呈を行った。
- ◇ 1990年（平成2）
6代目ペーロン船「海龍・輝龍・蒼龍・瑞龍」を建造。なお、「海龍」は相生学院高等学校・「陸」ペーロンチームに、「瑞龍」はコープこうべに貸与されている。また、「輝龍」「蒼龍」はそれぞれ相生市立双葉小学校・同那波小学校に保存・展示されている。
一般女子のチームが初めてペーロン競漕に参加した。
- ◇ 1992年（平成4）
相生ペーロン協会が設立された。
兵庫県立相生産業高等学校で海上運動会としてペーロン競漕が始まった。
- ◇ 1997年（平成9）
7代目ペーロン船「天竜・白龍・神龍・昇龍」を建造。現在は体験乗船に使用されている。
「白龍城」が完成した。西側は艇庫を備えた「ペーロン海館」とした。
- ◇ 1998年（平成10）
「ペーロン護岸」が完成し、ペーロン競漕の応援・観戦がしやすくなった。
- ◇ 1999年（平成11）
中学生ペーロン（学校対抗）中止。

- ◇ 2002年（平成14）
長崎市と「ペーロン交流都市」提携を行った。
皆勤橋撤去。「道の駅 あいおい白龍城」オープン。
8代目ペーロン船「海龍・輝龍・蒼龍・瑞龍」を建造。
ペーロン会場でアジアドラゴンボート選手権大会が開催された。
- ◇ 2005年（平成17）
海上の部の運営事務局が相生市産業振興課商工観光係に移行された。
高知県須崎市と「ドラゴンボート交流都市」提携を行った（2000年に「龍舟交流都市」に改称）。
- ◇ 2007年（平成19）
ペーロン検討委員会答申。
- ◇ 2008年（平成20）
9代目ペーロン船「飛龍・雲龍・蚊龍・青龍」を建造。
中学生ペーロン大会が再開された（ペーロン祭とは別日に開催）。
- ◇ 2011年（平成23）
ペーロン祭を東日本大震災復興祈願ペーロン大会とした。
- ◇ 2015年（平成27）
10代目ペーロン船「天竜・白龍・神龍・昇龍」を建造。
- ◇ 2016年（平成28）
相生ペーロンが相生市の無形民俗文化財に指定された（名称：相生ペーロン、内容：ペーロン競漕、保持団体：相生ペーロン協会）。
- ◇ 2017年（平成29）
新「相生ペーロン海館」竣工予定。

〈相生ペーロン船〉

使用される船は、競漕に用いられることや細長い漕艇用小舟であることから、正式には「艇」の文字が用いられる。ペーロン艇は、中国や長崎に由来する伝統的な意匠や装飾が見られる。また、ペーロンの代名詞のように使われてきた「ドン・デン・ジャン」が示すように、銅鑼・太鼓をはじめとする独特の道具が用いられる。

- ◇ ペーロン艇と主な道具（4代目以降）
全長12.00m、中央部艇幅1.58m、総重量500kg。樹齢100年ほどの熊本産杉材。
 - みよし（船首部分）…龍の「長く伸びた口」もしくは「尖った頭」を表現しているといわれる。黒色に塗装され、取り外しができる。最先端は赤色に塗装され、艇名の一文字が白色で記されている。中央部に紅白の布を巻き、さらに紅白のしめ縄で縛ってひょうたん形に結びあげる。後方部には艇旗が取り付けられる。
 - 両舷…漕手3番～10番あたりに矢模様が描かれている。矢模様先端の白く塗られた膨らんだ部分は、^{やじり}鑊を誇張させたようでもあり、龍の目を表現したようでもある。
 - 銅鑼…造船所内の鍛造工場で作られてきた。銅60%、亜鉛40%の合金の板を「へらしぼり」という技法で製作される。直径71.5cm、厚さ3mm、重量約13kg。撥は^{ぼち}櫂または^{かし}櫂。

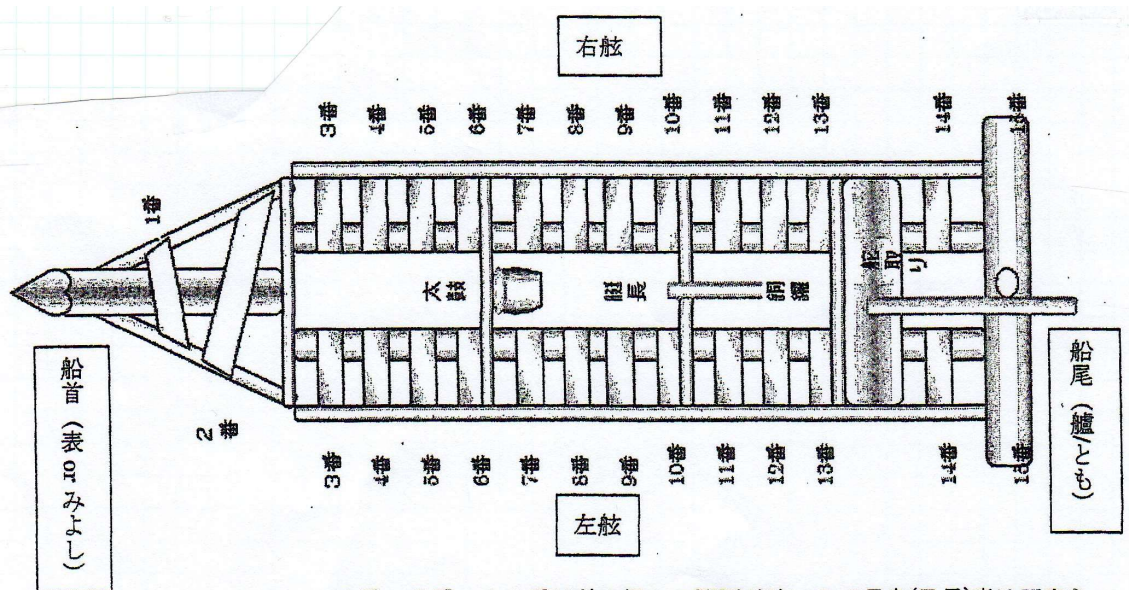
檣材に厚さ約5mmの牛革を巻いている。

銅鑼掛の前方上部には御幣が取り付けられる。

- 太鼓…姫路市網干区高田の真田太鼓店で製作されている。檣材、牛革で、直径約39cm、重量約12kg（平均）。撥は材質（檜材）、形状を定め、主催者準備品を使用している。
- 舵棒…3代目までは伝馬船の櫓が用いられていたが、現在は舵棒の支柱が船尾に設置され、小型になっている。
- 櫓…刃（水をとらえる部分）は檣材、柄と握りは杉の間伐材で作られている。刃幅は先端で17cm。柄の長さは1番櫓が120cm、2番・12番櫓が110cm、3番～14番櫓が90cm。
- 艇旗…みよし（船首）後方にある支柱に取り付けられる。旗の色は赤（1コース）・白（2コース）・青（3コース）・黄（4コース）に分けられる。
なお、ゴールの判定は白く塗装された艇旗の支柱で行われる。
- 指揮棒…艇長が持つ「采配」で、先端に白布の梵天と5色～7色のリボンテープを房状に巻きつける。長さは150～180cm。
- その他…艇内に入った飛沫をかき出す「垢かい」、水をふき取るスポンジ、各種ロープ類、保護具類などがある。

◇ 乗船者の役割（4代目以降）

- 艇長（1名）…船の最高責任者（安全責任者）
- 舵取（1名）…船の操縦（安全航行操縦者）
- ドラ（1名）…銅鑼奏者（艇長の合図で太鼓と合わせる）
- 太鼓（1名）…太鼓奏者（艇長の合図でドラと合わせる）
- 漕手（28名）…漕手（櫓を持ち人力で漕ぎ船を進める） 1番・2番は左右1名、3番～15番は左右2名（15番は「はね」といわれる）。経験や体格・体力等を考慮して配置される。



* 3番、7番、11番は前の梁との間隔が狭いので長身(足長)者は不向き。

乗船位置概略図 西角 2011

〈相生ペーロン競漕のコース〉

1958年（昭和33）から現在の海域で行われるようになったが、コース設定を3度変更している。1998年（平成10）の「ペーロン護岸」完成後は、護岸の観客席から観戦しやすいように、平行四辺形コースから長方形コースに変更し、護岸側が第1コースになるようにした。その後、参加チームの増加と競漕の醍醐味が味わえるようにと、4コースに増やしていった。

現在の競漕の実距離は、1次予選・女子は600m、順位戦・決勝戦は920mである。

〔註〕

『相生時報』第45号（1934年5月12日発行）の記事による。中止にした理由は不明である。

〈参考文献・図出典〉

相生市中学生ペーロン 2017 伝統文化の学びの充実実行委員会編『相生市の伝統文化「相生ペーロン」』

尾川幾一編 1933～1939『相生時報』ペーロン関連記事（相生時報社）

小栗栖健治 2016「指定理由書」（相生市教育委員会）

佐々木泰彦 1987「相生ペーロン祭」『相生市史』第4巻（相生市・相生市教育委員会）

中濱久喜 2017「3代目ペーロン艇『天龍』『れきみん 資料館だより』（相生市立歴史民俗資料館）

西角義一 2008『発祥・伝来・そして今 相生ペーロン競漕』（相生ペーロン祭協賛会）

西角義一 2011『相生ペーロン競漕 簡単ガイド』（相生ペーロン協会）

橋本一彦・松本恵司編 2009～収集『相生映像アーカイブ（データ版）』（NPO法人相生いきいきネット）

松本恵司編 2008『ふるさと相生の二十世紀』（相生まちづくり塾 ふるさと相生の二十世紀写真集発行委員会）

森田穰平ほか 1960『播磨造船所 50年史』（株式会社 播磨造船所）

〈付記〉

下記の皆様、機関・団体より有益なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

桑名雅彦、桑本健一、佐藤 岳、鈴木史朗、鈴木豊彦、橋本一彦、松本恵司

相生ペーロン協会、相生市教育委員会学校教育課、相生市文化会館

* 表紙写真：1950年（昭和25）頃 橋本・松本編 2009～

（2017年8月10日作成 文責：中濱久喜）